Café bohemia

Motoharu Sano Official Fan Association since 1986

http://mofa.moto.co.jp/ 2014 秋 Vol.135



Café bohemia VOL.135

mofa

編 集 長: 大山貴
副編集長: 山田和弘
編　　集: 奥山千亜紀　小林史明　矢島一朗
編集協力: MFMP
デザイン: コヤママサシ
印　　刷: 高千穂印刷（株）
ファンクラブマネージメント: 有限会社カミングスター

監修: 佐野元春

Café bohemia Vol.135 October / 2014
発行: mofa　〒150-8691 東京都渋谷支店私書箱76号
編集: カフェボヘミア編集部　tel.03-5469-0922

http://mofa.moto.co.jp/

Café bohemiaに掲載された記事を許可なく転載することを禁止いたします。
2014 © M's Factory Music Publishers Inc. All rights reserved.

ザ・コヨーテ・バンドとのコラボレーションもいよいよ結成9年目にして機が熟してきた。

2014年9月29日　インタビュー・文／Cb編集部

秋ツアー、バンドメンバーが初日から「まるで初日じゃないみたい」って。

―　昨日、秋の全国ツアーがスタートしました。初日の川崎公演を終え手応えはいかがでしたか？

元春：　僕はいつものように、いい感じだなと思いました。びっくりしたのはザ・コヨーテ・バンド（CB）のメンバーの感想です。ライブが終わって楽屋に戻ってきて、みんな「まるで初日じゃないみたいだ」と口々に言っていました。それくらい自分たちも演奏に充実を感じたのだろうし、オーディエンスの雰囲気もとてもすごかったですし、バンドはそういうことを感じたと思います。僕はいつもの感じです（笑）。

―　クラブチッタ川崎での公演は初めてだったと思うんですけれどもいかがでしたか。

元春：　楽しかった。小屋としていいんじゃないかと思った。多少ライブな小屋でしたけれども、僕らのようなバンドには向いていると思いました。

―　今回のツアーはライブハウスからホールまで会場の大きさも様々ですね。

元春：　ライブハウスはライブハウス、ホールはホールでそれぞれパフォーマンスは違いますし、内容はもちろん変えていきます。

―　ツアーのテーマのようなものは決められているのでしょうか？

元春：　CBは結成して9年目を迎えて、とても充実した時期に入りました。既に「COYOTE」「ZOOEY」というスタジオアルバムを2枚リリースしていますし、来年発表したい新作アルバムの制作も順調に進んでいる。CBとのコラボレーションもいよいよ結成9年目にして機が熟してきた。当然、レコードだけではなくライブで、充実した僕らの演奏を観てもらいたい、そういう思いがあります。ですので、今回のツアーではCBと創り上げた2枚のアルバムと新作アルバムからも何曲か聴いてもらいますし、ライブにはなくてはならない僕のクラシックも演奏して、これまでのどのツアーとも違う内容でいきたいと思っています。CBのアイデンティティをはっきり打ち出していく、そういうツアーになると思います。

―　川崎公演ではCBの売りとしてのコーラスワークに触れるMCもありました。

元春：　そういうことはいちいち僕の方から言うことではなくて、ファンが他のバンドと比べて、CBはここがすごいよねってみんな言ってくれていると思う。そのうちのひとつは、それぞれにスタイルを持った優れたソングライターが3人もいるということ。それからCBにおいては僕の創った曲を中心に彼らが演奏していてバッキング・ボーカルも一緒にやっている。それはバッファロー・スプリングフィールドやイーグルスと同じようなエリアのバンドだということを示しています。日本ではとても少ないです。ハーモニーがいいね、というロックバンド、観たことありますか？ポップなエリアの人たちにはそこそこいるけれども、ロックバンドでハーモニーがしっかりしているというのはあまりいなんじゃないか。その領域にCBは食い込んでいる。本当によく注目してほしいのは、CBの一人ひとりが今の国内における精鋭のミュージシャンたちだということ。ザ・ホーボーキング・バンド（HKB）の時も、結成時にはファンはあまりよくわからなかったかもしれないけれど、十数年経って

佐野元春監修
ヴィジターズ・デラックス・エディション
ついにその全貌が明らかに

VISITORS DELUXE EDITION
【完全生産限定盤】



2014年10月29日発売

http://www.moto.co.jp/Visitors_30th/

MOTOHARU SANO


KORG

これから先、ザ・コヨーテ・バンドのメンバーが日本の音楽シーンで非常に重要なミュージシャンになっていく。

HKBのメンバーは今の国内の音楽シーンを支える中核的なミュージシャンたちだということはもうわかったと思う。そういうミュージシャンたちを僕は束ねてきた。同じようにCBもそうです。これから先、彼らが日本の音楽シーンで非常に重要なミュージシャンになることが僕には見えている。その彼らとのコラボレーションということなので、ぜひ、そこに注目してもいいんじゃないかなと思います。

自分の中でリアリティを感じれば、何歳で書いた曲かは問題じゃない。

―― ライブでは新曲も披露されました。1曲は15歳の時に書かれたというもので驚きました。

元春：　今レコーディングをしていて、もう16曲くらい録音しています。まだまだ続けたいと思っていますが、その中でライブで楽しい気持ちになってもらえる曲を何曲かピックアップして演奏しています。川崎公演では新しい曲を2曲披露しました。曲というのは自分の中でリアリティを感じれば、何歳で書いたかはあまり問題じゃないです。あの曲はとてもよいポップソングだと思う。いずれレコードになりますし、その時にみなさんにはゆっくり聴いてもらえると思いますけど、大事なのは新しい曲をライブでどんどん披露していくということです。そしてライブで気に入ってもらったものをレコーディングに生かして記録に残していくというフローです。日本でそれをやっている人はいないです。でも僕たちはライブバンドだという自負がありますから、勇気を持ってそれをやる。新曲をライブやツアーで披露するというのは勇気のいることなので、当たり前だとは思わないでください。ただ、そこでファンの賞賛が得られれば大きな勇気に繋がりますし、それを堂々と次のレコードに収録することができるということですね。

―― ライブ向きなのがあの2曲だということで今回持ってこられていたんですか。

元春：　どんな曲を披露してもいいんですけれどもね。ただやはりアルバム「COYOTE」の曲をライブでやっていく中で、その文脈にスッとはまる曲というのが選んだ理由です。これは非常にプロフェッショナルとしての精査の上ですので、詳しく話しても多分わからないと思う。

―― 10月、11月は週末はほとんど日本中のどこかで佐野さんがライブをやっているというスケジュールになっています。

元春：　僕たちバンドが持っている意識は、演奏を楽しみたいというのもあるし、今回は普段これまであまり行かなかった街、それからご無沙汰している街、そこに僕らから出向いて行って楽しい時間を過ごそうという、そのための

ライブハウスツアーです。それと同時にもうひとつのテーマは、来年の35周年ホールコンサートに向けての助走という、そういう意識も多分バンドの中にあると思う。僕の中にも多少はある。ライブをもって僕のファンたちとよい時間を過ごしたい、佐野元春は元気だよというところをライブを通じてみんなに知ってもらう、そういう気持ちでツアーをやっています。

―― これからの公演も楽しみにしております。

フジロックでの「ヴィジターズ」完全再現、僕も楽しかった。

―― 「ヴィジターズ」リリース30周年記念の幕開けとなった、7月25日のフジロックフェスティバルへの出演についてお話をお伺いします。アルバム全曲完全再現、いかがでしたか。

元春：　楽しかったですね。ザ・ハートランド(H)、L、HKB、みんな集結してくれましたし、フジロックという舞台で、「ヴィジターズ」を全曲演奏するんだということに彼らも意義を感じてくれていた。こうしてアルバム「ヴィジターズ」を曲順通りに、またあの当時の編曲通りに演奏するという機会は初めてでしたからね、僕も興奮しました。

―― HL、HKBからのメンバーを中心にバンドが編成されていた中、女性ボーカルとして、ラブ・サイケデリコのクミさんが参加されていました。

元春：　聴いていただけるとわかると思いますが、アルバム「ヴィジターズ」の曲には、女性のバッキング・コーラスが何曲かに入っています。今回はアルバムの再現ライブということで、バッキング・ボーカルの女性を2人ほどずっと考えていたんですけれども、ライブの表現ということになると、バッキング・コーラスというよりも、むしろもう一人の表現力を持った女性シンガーと一緒にやる方が、よりアルバム「ヴィジターズ」各曲の表現が豊かになるのではないかなと思い、さんざんいろいろと考えた結果、ハッと気が付いたのが、ラブ・サイケデリコのクミさんでした。彼女とは、30周年記念ライブの時に、大阪城ホールで共演しました。その時はラブ・サイケデリコの2人との共演でしたけれども、彼女のボーカルの表現力というのは素晴らしいものがありますからね、同じステージに立って、また共演したいと思っていました。この「ヴィジターズ」を一緒にやってみたいなと思って彼女に連絡してみたところ、喜んで駆けつけてくれました。

―― 彼女とはテレビ番組（フジテレビ系「僕らの音楽」）でも共演されていましたね。

元春：　そうでした。あの時は、ラブ・サイケデリコからのリクエストもあって、ボブ・ディラ

ンの曲をカバーしました。

―― 彼女はバイリンガルでもありますし、アルバム「ヴィジターズ」の表現にはふさわしかったのではないでしょうか。

元春：　そもそも彼女は素晴らしいシンガーですし、このアルバム「ヴィジターズ」をリスペクトしてくれていましたからね。彼女自身が、このアルバムの曲それぞれを演奏して唄うという、このことに意味を持って臨んでくれたと思います。そこが光栄でもありましたし、結果素晴らしいライブになったとも思っています。

―― 同じアルバム全曲再現でも、昨年行われたアルバム「SOMEDAY」の名盤ライブとは全く違う場所をセレクトされました。

元春：　今年は会報のインタビューでも、「ヴィジターズ」リリース30年目を迎えて、それを巡って何か意義あることをやってみたいということを語っていたと思うんですけれども、まずはその約束を果たさなければなというところで今回実現しました。

―― ひとつお聞きしたかったのが、アンコールのセレクトです。『アンジェリーナ』のスローバージョンでした。

元春：　まあ、あのままですね、感動してもらえればいいなと(笑)。要するに、あらゆる言葉が無意味になってしまうほど素晴らしかったということです。そして、あまりにも素晴らしいと人々は言葉を失う…それくらいのできごとだったのではないでしょうか。

―― フジロックに駆け付けたファンにとっては大変なライブを目にすることができました。

元春：　今回このフジロックでのライブ、後に1曲、『ニュー・エイジ』がテレビで放映されたということを聞きましたけれども、リリース当時、アルバム「ヴィジターズ」に触れた人たちはたくさんいますからね、当時聴いてくれた方の多くにまだ観てもらえていないというのが少し心残りではあります。何か機会を得て、30年目の「ヴィジターズ」、アルバム完全再現、これをもっと多くのファンに観てもらいたいなという気持ちが残っています。

僕はいつも、正面から聞こえてくる声ではない声を聴こうとしている。

―― 次にNHKBSプレミアムにて放映された、「名盤ドキュメント佐野元春「ヴィジターズ」～NYからの衝撃作30年目の告白～」についてお聞きします。当時のご自身のラジオ番組で、アルバムを聴いたファンの「冷たい」「怖い」といった若干批判的な感想も紹介されていたことに驚きました。

元春：　僕はいつも、正面から聞こえてくる声ではない声を聴こうとしている。僕の耳に聴こえてこない声を僕の方から耳を澄まして聴こうとしている。それがコミュニケーションかなと思います。ファンとのコミュニケーションですね。

―― 批判的な評価について、伊藤銀次さんが「僕なら紹介しない」って言われていましたけれど、そのあたりの意思は20代の佐野元春の思いということでしょうか。

元春：　今回の「ヴィジターズ」のドキュメンタリーもどのような評判なのかは僕はわからないですけれども、当時フレッシュな感性で「ヴィジターズ」に触れたときのいろいろな喜びや驚きといったものがおそらく聴き手の何人かの中にはあったと思うんですね。その思いというのをきっと大事に大事に30年間、心の中に保ってきている人たちもたくさんいる。そう簡単にNHKのドキュメンタリーでわかったかのように言われても、どうなんだよって思っている。そういうファンもいるということを僕は忘れていない。だからあのドキュメンタリーが素晴らしいと言ってくれるのは、それは僕もやってよかったな、協力してよかったなと素直に思いますけれども、それと同時に、いや、「ヴィジターズ」ってもっと違う見方もあるんだよって、俺はそのことを知っている、私はそのことを知っている、そういうサイレント・マジョリティの声も僕は聴こうとしています。

アルバムを創るとき自分にとって強い理由があり、表現にも僕なりの必然性がある。

―― こうしたドキュメンタリーを観ると、作品ではいろいろな意図や考えが表現されているという一端を感じられるような気がします。

元春：　ものを創るとき、僕もアルバムを何枚も創っていますけれども、自分にとって強い理由があるんです。どんな細かい表現にも、僕なりのその表現に行き着く必然性といったものがある。伊達や酔狂でこんな感じとかフィーリングとか、というところでまとめてはいないということです。ただそれは僕のとても個人的な景色の中で個人的に自分の中で決着をつけているものですから、あまり人と共有できるものではないとそもそも思っているんです。端(はな)から共有できないものを共有しようとしても、わかってくださいと言っても、それは無理です。音楽というアートの形にして人に届ける理由がそこにあるんですよね。何もかも説明できないものを詩にし、音にして演奏して唄い、レコード化しライブで唄うということなんです。ただ「ヴィジターズ」のようにもう30年も時を経ている自分の作品については、かなり対象化して見ることができるようになったんだ。あの「ヴィジターズ」という強力な作品について語るには30年目の今日(こんにち)というかな、そのくらい月日が必要だったのかなと思います。これから先もいろいろな新たな発見が自分の中にあるんじゃないかなと思います。ただ、あのアルバム「ヴィジターズ」という強力なレコード、30年間心に留めてくれたファンには感謝したいです。また30年目にメディアが取り上げてくれる、話題にしてくれるというのも光栄なことだなと思いました。そういう振り返りができる音楽作品は僕が知るところそう多くはないですから、僕のファンには喜んでもらえたかなと思っています。

―― 制作に関与されたジョン・ポトカーさんやバシリさんがレコーディングの風景をついこの前のできごとのように振り返っているのが印象的でした。

元春：　欧米の人たちというのは非常にインタビューに慣れていますから、何年前のことであっても昨日そこで起こったかのようにきちんと言葉で表現できるんです、何となくではなく。そうして生きていますから、客観で生きているんではないですかね。僕たちはずいぶん主観で生きているんじゃないかなと、ときどき思うと



『コンフュージョン』、次の「カフェ・ボヘミア」に繋がる ひとつの橋のような印象を持った。

持っている熱気、何よりもそこに集まってきた10代、20代前半のオーディエンスの熱気といったものがしっかりと記録されていたんです。この記録をどうにかまとめてひとつの観やすい形にして今の成長したファンたちに還元したい、そういう思いに立って一からじっくりと編集をしてまとめあげました。非常にお金もかかりました。それが映像ですけれども、その他に映像部分では今回ニューヨークに行ってジョン・ポトカーと「ヴィジターズ」を巡るいろんな楽しい話をしまして、そのドキュメントも収録されているので、これも非常に価値ある映像になっていると思います。

それからCDでは、今回ファンに楽しんでほしいのは、ライブアルバムですね。「ヴィジターズ」最終公演、品川プリンスホテル・アイスアリーナの1日目、2日目の中から「ヴィジターズ」を巡るよいライブ音源を集めて1枚にしました。前回「ノー・ダメージ」パッケージの中にも当時のエネルギーを凝縮したようなライブアルバムをまとめましたけれども、今回はそれに続く80年代の僕のよいライブのアーカイブということで「ヴィジターズ」のライブアルバムという形でまとめました。もちろんかなり当時の熱量というか、時代の空気さえ感じるよい仕上がりになったのでこれも楽しんでもらえればと思います。これもゼロから当時のテープを使って、僕のことをよくわかっているミックスエンジニアがまとめてくれました。

そして何と言っても新曲と言ってもいい未収録曲、これも今年マルチテープが見つかったことがそこに結びついたということですよね。マルチテープの中にそれが入っていた。8割くらいレコーディングしていましたけれども、いろいろと自分で思うところがあってアルバムには収録しなかった。残りの2割を僕の方で少しレコーディングして、いくつかの音をダビングして「ヴィジターズ」のエンジニアであるジョン・ポトカーにミックスしてもらうことで仕上げました。これも自分の曲ではありますけれども、30年前というあの時代を考えれば随分先進的な、しかもサウンド自体も非常に充実している、ユニバーサルレベルのサウンドプロダクションであるなと、曲も悪くないなと、まとめた時そう思いました。

― ご自身ではこの曲のことは覚えていましたか？

元春： マルチテープが発見され、見知らぬタイトルがテープに書いてあったんだけれども、何だろうと思って聴いた時に思い出しました。

― 「ヴィジターズ」の「9曲目」、楽しみにしています。

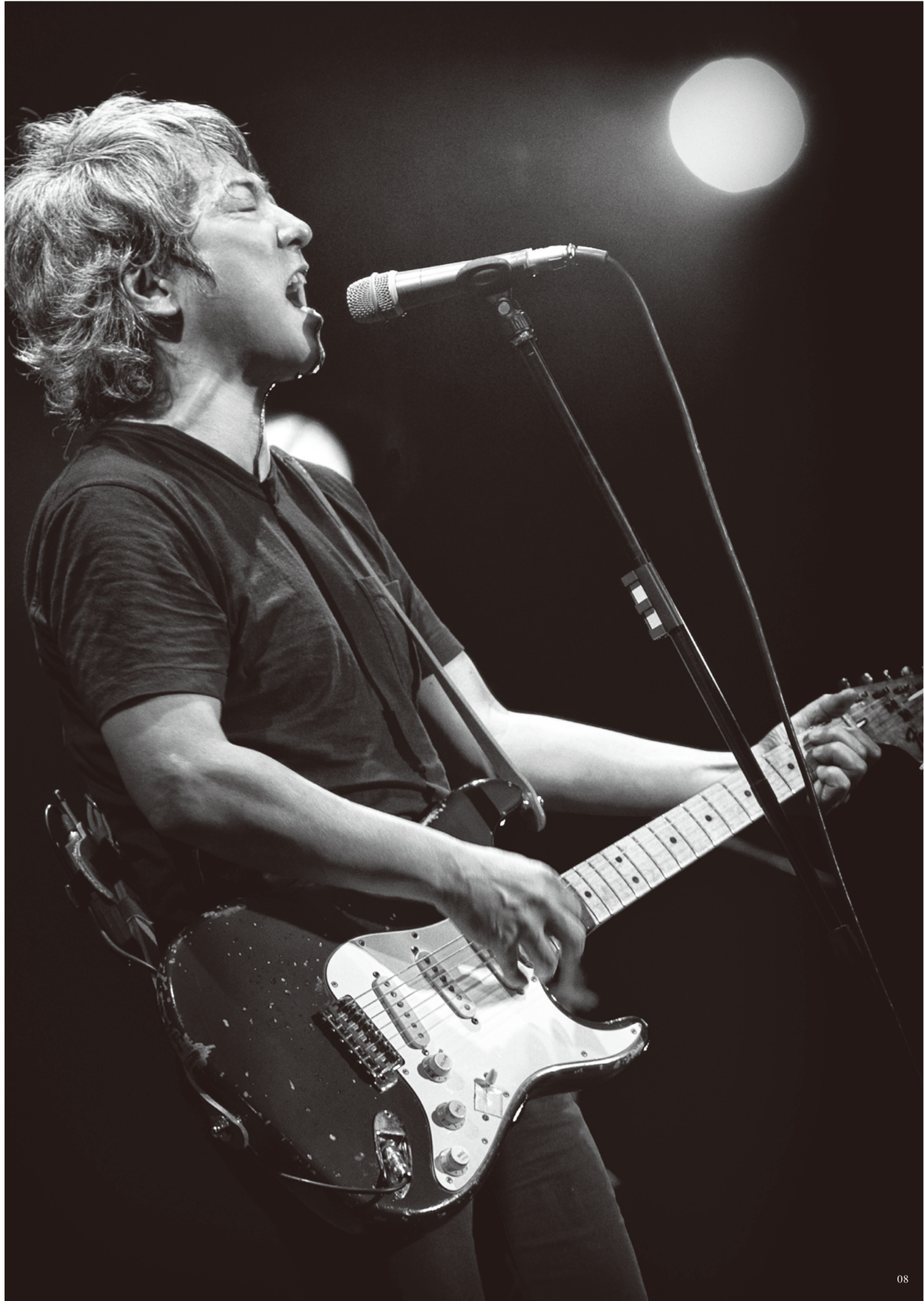
元春： アルバム「SOMEDAY」までで構築してきたサウンドプロダクションを全て自分の中でおしまいにして、全く新しい誰も聴きがあります。何でも自分の思いというものがあったら、それをあまり感情的なところで表出するのではなく、理知的な言葉で人に伝えられるような訓練というのが必要かなと思います。欧米の人たちにインタビューするたびに思います。まるで一週間前、僕があの扉をくぐって、そしてデスクについてコーヒー飲んでいることさえも彼らは具体的にストーリーとして喋ることができる。そうした具体的なストーリーでもってまた別の人がそこに新たな意味を見い出してくれるということです。だからドキュメンタリー・フィルムに当時制作に関わってくれた、特にエンジニア、ジョン・ポトカーですね、彼の出演は僕の方から強くNHKに望みました。

新曲と言ってもいい未収録曲、マルチテープの発見がそこに結びついた。

― 「ヴィジターズ」デラックス・エディションのリリースが迫ってきました。ネット上では未発表音源の一部視聴も始まってファンの気持ちも高まっているところですけれども、リリース直前の今、改めて聴きどころ、観どころをお聞かせいただけますか。

元春： 今回のデラックス・エディションのリリースは何と言っても今年「ヴィジターズ」のマルチテープが発見された、そこから始まっています。この「ヴィジターズ」デラックス・エディションを手にしてくれた方はもう読んでくれたと思いますけれども、僕が序文を書いています。その序文にこの30年目の「ヴィジターズ」に寄せる思いをしたためました。そこに書いてある通り、まず先ほども言いましたけれども30年という長い間アルバム「ヴィジターズ」を心に留めてくれたファン、僕の音楽を大事にしてくれたファンのみなさんにまず感謝したいですね。それともうひとつ、SONYというレーベルと契約してよかったなと思うことがありました。それは親会社がSONYということもありますけれども、SONYというレーベルは昔から映像・音にとても意識的なレーベルで、記録をきちんとした形で撮っておいてくれた。それはライブの音にしろ、ライブの映像にしろ、またレコード音源にしろね。だからこうして30年目にそれらを発掘し再発見し再構築することでファンにそれを還元できるということです。彼らがしっかりと音と映像を記録していてくれたのでよかったなと思います。

「ヴィジターズ」ツアーの品川プリンスホテル・アイスアリーナでのファイナル公演、2日間やりましたけれども、2日目は商品になっているので見覚えのある、観たって方もいると思いますが、実は初日もカメラを回していたんです。初日は言ってみれば2日目の本番に向けてのテストシューティングですね。カメラを4台ぐらい回して、その4台でテストシューティングしているものを観ましたけれども、そのテストシューティングでさえも当時の僕やバンドがスエンジニアがまとめてくれました。



僕の中にあるいろんな要素を、一度のライブですべて見せるのは難しい話で（笑）。

―　さて、この夏もいくつかのライブイベントに参加されています。フジロック後ではまず、8月末に池上本門寺の野外ステージでビルボードライブのような素敵な音楽を聴かせていただきました。

元春：　事前の説明では、主催者の方から「あまり大きい音はたてられない」と。「だからアンプラグドに近い形でやってくれないか」って言うので、それだったらビルボードでやったセットに近いものを持っていけばいいかなと思って、それで現場に向かったんですね。そうしたら僕の前のバンドがガンガンエレクトリックで盛り上げているじゃない？「何だ、やっていいのか」みたいな（笑）。もっと正確にショウの趣旨を伝えて欲しかったよね。それでも僕らは楽しんだよ、夜風に吹かれて。あのHKBのセレクテッドメンバーが、それまではビルボードという室内で奏でていたものを屋外に持ち出して演奏してどうかなっていうところがあったけれど、意外と僕たちは心地よくできた。これで佐野元春を初めて観た人は、「佐野元春って随分渋い人だね」って思ったかもしれない（笑）。僕の中にはいくつもいろんなものがあるから、それをいっぺんに人に見せようって言ったって無理だよね。だから池上本門寺のライブはあの場所に合ったライブを僕たちは演奏できたんじゃないかなと思っています。

―　その翌週にはHKBのギタリスト佐橋佳幸さんの30周年記念ライブへのゲスト出演がありました。

元春：　何よりもギタリストとして佐橋君が長きにわたってよい仕事をしている。その中ではHKBのギタリストとしてのキャリアも非常に長いですから、僕もバンドの一員としてお祝いに駆けつけるというのはとても自然な気持ちでした。行ってみてハウスバンドを見たらほぼHKBだったから、じゃあ何を演奏しようかといった時にまずは「THE BARN」アルバムからの曲だよねって。Dr.kyOnからの提案もあったし、僕もそうだなと思って。それでアルバム「THE BARN」から久しぶりに2曲、『風の手のひらの上』と『ロックンロール・ハート』を演奏しました。初めて観た人は佐野元春っていうのは随分カントリー・ロックっぽくて意外と渋いなというふうに思ったかもしれないけれども、何度も言うようだけれども僕の中にいろんなものがあるので、いっぺんにそれを見せるっていうのは難しい話で（笑）。ただ、佐橋君のお祝いライブで「THE BARN」からの2曲をオリジナルのHKBと一緒に演奏するというのは、僕は個人的にはとても腑に落ちたし、そこを楽しんでくれたファンもいただろうと思いますね。あんなところで僕の過去のヒット曲をこれみよがしに演奏してもどうかなという思いはあります。

―　古田さんの40周年イベントの時もそうでしたが、HKBのメンバーもCBのメンバーもイベントなどでハウスバンドを組む時にはみなさん、そのバンドメンバーから選ばれますよね。佐野さんのファンとしてはすごく嬉しいです。

元春：　それだけプレイヤービリティの高いミュージシャン、そうなっていくミュージシャンを選び、そうした彼らとずっとコラボレーションしてきたということです。常に全てにおいて最高のものを僕のファンには届けたいという気持ちでずっとやっています。

―　更にその翌週、音楽イベント「ザ・ビッグ・パレード2014」のスペシャルキーノートセッションに出演されて、一時間ほど音楽プロデューサーの山口（哲一）さんと現在の音楽ビジネスについてお話されました。非常に興味深かったですけれども、あの辺りのお話は佐野さんの得意な分野かなと思うのですが。

元春：　得意じゃないですね（笑）。そもそもああいう講演会に出て行くということ自体、本当のことを言うと僕は消極的です。ただこういうことについて喋れるミュージシャンは佐野さんしかいませんからとか言われると出て行かざるを得ない時もありますよね。心の中では消極的です。でも、僕のこれまでの経験が新しい時代のミュージシャンや音楽制作者に何か役に立つということであれば、自分の拙い経験をお話します。

―　80年代、90年代から現在のような音楽業界の展開に非常に意識的であったミュージシャンで、佐野元春以上の人を私たちは知りません。

元春：　そういうところで別に評価されたいと思っていないんですよね（笑）。やっぱり作詞作曲、パフォーマー、アーティストとして、そこですよね。でも、どう客観的に見てもレコードが売れない時代に同業者として思うことは、才能のある音楽人は新しい世代から何人か出てきていますし、これからもどんどんいたことのないロックサウンドをということで「ヴィジターズ」を創った。この未収録曲の『コンフュージョン』を聴いた時に思ったのは、次の「カフェ・ボヘミア」アルバムに繋がっていくひとつの橋のような印象を持ちました。アルバム「ヴィジターズ」というのは、言ってみれば次のアルバム「カフェ・ボヘミア」に導いた作品であるという見方もできると思いました。

―　今回の作品には写真集も付いているようですね。

元春：　写真集は「追悼・岩岡吾郎さん」です。こちらにも僕が序文を書きました。しっかりした写真集になったと思います。当初は「エレクトリック・ガーデン」というパッケージの中に小さなブックレットでまとめられましたけれども、写真は小さいと細かいところはよくわかりませんから、大きな写真にしてフォトグラファー・岩岡吾郎さんの写真技術をしっかりファンに見てもらえる、そういう機会だと思って、しっかりしたブックレットを作りました。

―　今回のパッケージはアナログシングル盤サイズということですが、通常のCDジャケットサイズに比べるとかなり大きいですね。

元春：　この7インチサイズのデラックス・エディションというのは今後増えてくると思います。どうしてもデラックス・エディションとなると音だけではなく図版、ビジュアルもしっかり表現したいということになりますから、面積がきちんととれるアナログ7インチ盤のパッケージというのはいいなと僕は思っています。

道を作るのに少しでも何か僕の経験が役に立てばいいなという思いから、ああいう講演会に頼まれれば出て行きます。

今年もファンが楽しめるクリスマスライブを企画中。

―― 10月、11月とツアーが続きますが、その後は決まっているご予定などはございますか。

元春： 毎年クリスマスをテーマにライブをやっていますから、今年も場所をセットしてファンのみなさんが楽しんでくれるようなクリスマスライブを企画中です。

―― 年末あたりもまた例年通りのイベントへの出演を期待してよいのでしょうか。

元春： そうですね。年末のロッキンオンジャパンのイベントですね。多分この号が出る頃にはオファーが来ていると思います。そうした出演もあると思いますし、ずっとツアーを続けて新曲を披露していますから、ダウンローディングでその新曲をシングルカットするということも考えていいかなと思っています。ツアーをやって新曲をやればファンのみなさんからいろいろと声が返ってきますから、その声を聞いてじゃあシングルで先に出そう、そうしたことも考えられますよね。

―― まずは11月まで続く全国ツアー、素晴らしいライブになることをお祈りしています。今日はお忙しいところありがとうございました。

出てくるでしょうけれども、その彼らがいろいろなことを思い悩まずにクリエイティブな羽を大きく広げることができたらそれはそれで音楽文化の発展に繋がって行くと僕は信じている。そうしたよい才能が一生懸命やっているのにそういう音楽を必要としているところに届かないとか、徒労に終わってしまったとか、あるいはビジネスという枠の中で創造性が限定されてしまうとかね、そういう場が多くなると残念だなと思います。もっとそこは自由であるべきだなと僕は思います、僕がそれをずっと求めてきたように。

僕はある程度弁が立つしさ、ある程度喧嘩も強いからさ、ガンガンガンガンやってこられたけれど、誰もがそうじゃないから。ですので、同業者として素直に素晴らしい若い才能と会うとハッとさせられますし、若い頃の自分を思い出したりもしますから、そうした彼らがあまりつまらない思いにならないような

「ヴィジターズ」再現ライブ in フジロック・フェスティバル

2014年 7月25日(金)、新潟県・湯沢町・苗場スキー場

佐野元春ファンなら誰もが知るように、元春は3つのバンドとともに30年を超えるキャリアを歩んでいる―ザ・ハートランド(HL)、ザ・ホーボーキング・バンド(HKB)、そしてザ・コヨーテ・バンド(CB)。それぞれのバンド移行時には常にそのバンド間の橋渡しをする人物が存在しているということはこのバンドの変遷を見るうえで非常に興味深い事実だと思う。

HL解散後、HKBの結成に際して、唯一両方に名を連ねた西本明さん。西本さんのHKB脱退後は、かつてHLに所属した古田たかしさんがHKBに復帰してその役割を果たしていると考えている。また、現在並立してライブ活動を行うHKBとCBの間での橋渡し役は大井"スパム"洋輔さん。本人曰く自身の役割は「佐野さんのお守り」という彼は、制作現場ではマニピュレーター、また共同プロデューサーとして、さらにステージ上ではパーカッション・プレーヤーとして、最近のライブ、創作等、佐野元春の表現活動において欠かせない存在となっている。

西本さん、古田さん、スパムさん、この3人がそろい踏みし佐野元春のステージを支えるのは昨年の「SOMEDAY」名盤ライブ以来。今回のフジロックのステージも「ヴィジターズ」オリジナル制作時の米国のミュージシャンとは異なるとはいえ、佐野元春サウンドの哲学をもっともよく理解し、引き継いでいく役割を担っているこの3人が揃うわけだから、その「再現」うまくいかないわけがない。事実、「再現」以上の表現が展開された。

「実は、当初アルバム「ヴィジターズ」の冒頭には、NYアンビュランス(救急車)の音を入れるつもりだったんだ。」このライブ出演の直前に行われたリリース30周年を振り返るファンクラブインタビューで、この事実を打ち明けてくれた元春。その幻の作品を再現するがごとく、バンドメンバー、元春の入場時には登場の拍手をかき消すかのようなNYのアンビュランスを思わせるけたたましい音が会場を包み込み、そのまま冒頭の『コンプリケイション・シェイクダウン』へとなだれ込んだ。

さて今回のライブ、HKBからのメンバーを中心に、長田進さん、西本明さんらHLからのメンバーらを加えたスペシャルバンド。さらにサプライズゲストとして、ラブ・サイケデリコからKumiさんがバッキング・ボーカルで参加。オリジナルのバッキング・コーラスのパートだけではとどまらず、『ワイルド・オン・ザ・ストリート』ではほぼ全編にわたり元春とツインボーカルをとり、また『シェイムHI君を汚したのは誰』では「偽り、策略…」と続くこの曲の象徴的なワードの連続を元春と一緒に唄った。こうしたオリジナルとは若干異なる表現を入れることで、「単なる30年前の作品の「再現」では終わらないよ。」との元春の思い、2014年版におけるアルバム「ヴィジターズ」表現を行うという決意が存分に伝わった。またKumiさん、「ヴィジターズ」など数曲ではギターも演奏するなど全編を通じて大活躍。「カム・シャイニング」でリズムを取る姿も可愛らしく、紅一点、ステージでひときわ目を引いていた。

7曲目、『カム・シャイニング』を前にもう一人のスペシャル・ゲスト、元HLのギタリスト、横内タケさんが登場。今でも元春ファンの間では高い人気を誇り、久しぶりの共演とあってしきりに声援が飛んでいた。『カム・シャイニング』のエンディング前のソロのパートでは元春も横内さんに近づいて、そのギタープレイを見守っていた。「ヴィジターズ・ツアー」の記憶を呼び起こしたファンも多かったのではないだろうか。

この日のステージでは、元春はアルバム「ヴィジターズ」全曲の演奏を終えるまではMCも行わず、演奏に集中した。ライブにおけるMCは確かに場の雰囲気を和ませたり、次の演奏曲により関心を持たせるなどの効果はある一方、曲の流れはそこで途切れてしまうこともある。この日の元春はアルバムの「再現」の観点から、曲のフロー、連続性という点からの各曲の響き合いも感じてもらいたかったのだろう。

この日の元春、アルバムにアンビュランスの音を挿入してリスナーに警告を促そうとしたアルバム制作時の心情に思いを馳せてか、また30年を経ても変わらない世界の現状を憂いてか、キャスケットの下に覗く引き締まった表情が終始厳しかったことが印象的だった。

オリジナルアルバムの曲順通りの8曲の演奏を終えて、メンバー紹介が行われた。だが元春とメンバー、その後も退場する気配はない。さてこの場で、これだけのメンバーを揃えて、何の曲を演奏するんだろう…この数秒間、いろいろな曲が頭をよぎった。こうしたことをライブの現場で頭を巡らせることができる幸せ、そしてイントロが聴こえてきたときのどよめき―『アンジェリーナ』(スローバージョン)。シングル盤『ストレンジ・デイズ』のB面に収められたこの曲。佐野元春の音楽というのはアレンジによってここまで表情を変えるのかということを感じさせてくれた思い出深い曲。それをフジロックという場で聴けているという現実は、ちょっとした夢心地だった。

フジロックで「ヴィジターズ」再現ライブをやるらしい、という噂が流れてきたとき、当初はその趣旨がよく理解できなかった。前年の「SOMEDAY」名盤ライブが熱心な多くのファンから受け入れられ、大成功に終わったことからすれば、「ヴィジターズ」も同じように大都市で再現されるべきなのではないかと思っていた。が、ふと気づいた。佐野元春の中では、80年代前半の代表作と言われる「SOMEDAY」と「ヴィジターズ」は全く異なる作品であって、同じように扱うわけにはいかないのだ。

「SOMEDAY」の再現はあれでよかったのだろう。名盤ライブでは、LPレコードの封を開け、レコード針をレコードに落とす映像、それとリンクして流れてくる「シュガータイム」のイントロに、オーディエンスは自身の30年前の姿を重ね、(元春自身は嫌うものの)若干のノスタルジックな雰囲気も手伝い、あのライブの熱狂を生んだ。

ただ「ヴィジターズ」の再現も同様に、と単純にはいかない。「ヴィジターズ」は自らも認める通り、佐野元春音楽の文脈、日本のポップ音楽の流れから少し外れた、ちょっと変わった存在だ。このアルバムの持つ特異性、異質性、このアルバムがリリースされた時のリスナーの戸惑いにも似た「空気感」までも再現するとしたら、聴きなれたファンばかりが待ついわば「ホーム」で演奏してはダメなんだ。だからここ、佐野元春ファンだけではない、外国人も含めた多くの音楽ファンの集うフジロックという場で披露することが必要だったんだ…。ステージ終了後に自分なりに納得した。

しかし、初のフジロック出演、しかも最大の「グリーン・ステージ」での出演となれば、オールタイム・ベスト的なセットリストを用意して披露するのだろうと誰もが予想するところ、こうしたテーマをもって臨むところはいかにも元春らしい。

さて、フジロック・フェスティバル。名前はもちろん聞いていたものの、今回元春の出演を機に初めて参戦した。日本最大規模の野外音楽イベント。広大な土地に点在する大小さまざまなステージで、3日間も続く音楽のお祭り。オーディエンスはそれぞれの楽しみ方をしている。タイムテーブルを見て、目指すステージに向けて黙々と山道を歩く人たちで、常に人の流れは止まらない。演奏中も、ステージ最前列でその演奏を思い切り楽しむ人、自分の用意した椅子に座って遠巻きにステージを眺める人、途中からそのバンドに興味を持ってどんどんステージに向かって歩いていく人…さまざまだ。もちろん時間によっては休憩タイムと割り切って飲食エリアで舌鼓を打つ人、後々のお目当てミュージシャンの登場に向けて英気を養うべく、寝ている人だっている。海外の野外フェスってこんな感じなのかなと思わせるなんとも自由な雰囲気。またステージ外でも飲食エリア他、ラジオ局や各種スポンサーのブースなど、お祭り気分が満載。さらに皆ゴミ捨てのマナーも素晴らしくて気持ちいい。元春登場の初日は幸いにして雨合羽を持参したものの使うこともなく、また暑いとはいえ苗場という高地、東京とは風が違う。お気に入りのミュージシャンの出演があれば最高だが、なくたって、音楽ファンにとっては夢の世界のようだ。音楽の楽しみ方の一つの形を教えてもらったような気がした。こうした場の存在を知らせてくれた元春に感謝したい。

(山田和弘)

INFORMATION * 135

ファンクラバーの熱い思いをペンに、またキーボードに託して、編集部までお寄せください。

Cappuccino Talk Meeting

このコーナーでは毎号募集するテーマに対し、ハガキ、封書などによる従来通りの投稿を受付するのに加え、インターネット上のmofaサイトのwebCbと連動して、サイトを通じて書き込んでいただくことも可能になりました。投稿方法に関わらず、本誌次号のコーナーに掲載されるチャンスが生まれます。皆さん奮ってご参加ください。

次回読者投稿コーナー　募集内容　　**締切り：2015年2月28日（土）必着**

今回募集するテーマは、次の3点に関する感じたこと、思ったこと、考えたことです。

1．2014年秋ツアー、その他ライブに参加して
2．「ヴィジターズ」デラックス・エディションを手に取って
3．本誌135号の感想

http://mofa.moto.co.jp/pc/members/fangine/ctm/index.jsp

MAIL ORDER カフェボヘミア バックナンバー

MOTOHARU NEWS LETTER「カフェボヘミア」のバックナンバーは引き続きMAIL ORDERを受け付けています。売り切れの際は返金させていただきますので、あらかじめご了承ください。なお、現在購入可能なバックナンバーはVol.43、50〜56、58〜134です。他は売り切れですのでご了承ください。

◎1冊 ￥850
◎郵便振替でお申し込みください。
◎振替用紙に次の事項を記入して商品代金と送手数料の合計金額をご送金ください。
　口座番号：00180-3-16594　加入者名：モウファA
　通 信 欄 ：希望の号名、数、会員番号、電話番号
◎送手数料は、全国共通です。
　1冊￥350、2〜5冊￥500、6〜12冊￥650、13冊 以上￥1,250
◎お申し込み受付期間　2014年12月30日（火）まで当日消印有効

テレフォンインフォメーション

mofa（モウファ）では、元春の最新情報をお伝えする24時間テレフォンインフォメーションサービスをおこなっています。スタッフからのメッセージと最新の情報を随時流していますのでご利用ください。
tel：03−5469−0922（スタッフの対応は平日の月曜〜金曜15:00〜17:00）

ファンレター

元春宛のお手紙・プレゼントは、「佐野元春様」と明記してmofa宛にお送り下さい。スタッフが責任をもって元春に渡します。他の係宛とは別送お願いします。

編集部へのお便り

カフェボヘミア編集部ではみなさんからのお便りを随時お待ちしております。ご意見、ご感想、編集部への提案など、何でもお寄せ下さい。住所、お名前、会員番号を忘れずに。
e-mail：cb@mofa.moto.co.jp

事務局へのお問い合わせ

事務手続きなどでご不明な点などございましたら、mofa事務局までお気軽にお問い合わせ下さい。メール・fax・電話・お手紙で受け付けております。
e-mail：member@mofa.moto.co.jp

全てのお便りの宛先

郵送：〒150-8691　東京都渋谷支店私書箱76号　mofa事務局内　各係
fax：03−5469−3179　※mofaオンラインサービスをご利用の方はe-mailをご利用下さい。
※件名に各係宛の明記と本文中に「会員番号」「お名前」をお忘れなくお願いします。

会員証再発行

会員証を紛失した場合は、実費＋送手数料で再発行します。郵便振替で会費口座へ500円を送金してください。
通信欄：会員番号、会員証再発行希望、電話番号をご記入ください。ご送金後、約1ヶ月で新しい会員証をお届けします。※ 会員証再発行は郵便振替のみでの受付です。

クラブ継続

「mofa」オンラインサービスへアップデートされることによりオンラインによる手続きが可能です。アップデート手続きは、無料です。まだの方は、ぜひ、「mofaサイト」をご利用ください。

◎アップデート手続きはこちらから ー http://mofa.moto.co.jp/
オンラインによるカード決済、コンビニエンスストアをご利用頂けます。従来の郵便振替による受付も今まで通り可能です。

期限切れ後3ヶ月間は継続手続きが可能ですが、その場合期限月にさかのぼっての処理ではなく入金された月からの一年間の継続となり会費未納期に出された会報、DM等は一切お送りできません。4ヶ月以上未納の場合は再入会となります。会費は期限の切れる月の20日までにmofaオンラインサービス又は郵便振替にてご送金下さい。期限切れはトラブルの原因になりやすいので充分気をつけてください。

※ 会員期限証（受領証）は振込受領証またはカード引き落とし明細でご確認頂ける為、発行は致しませんのでご了承下さい。
※ 会員期限は、mofaサイト・発送物宛名シールにてご確認いただけます。宛名シールの出力準備の都合上、末日に継続手続きされた方は旧期限のデータで表示されますが、手続きに不備などなければ完了しております。

郵便振替口座番号：00190-1-106838
加入者名：モウファ
送金金額：1年￥5,000
通 信 欄：継続希望と会員番号、電話番号
※ 旧用紙でもご送金頂けますが金額にご注意下さい。

住所変更

住所、氏名が変更になる場合は、速やかに「mofa住所、氏名変更」係まで、おハガキでご通知下さい。mofaオンラインサービスをご利用の方は、フロントデスクのMOTO TVの下にあります、「メンバーシップ情報」よりご自身で登録データの変更が可能です。尚、発送物の関係上、必ず郵便局に転送届を出すのもお忘れなく。他の係宛のものに同封されますと手続きが遅れる場合がありますので、必ず別送してください。

編集後記

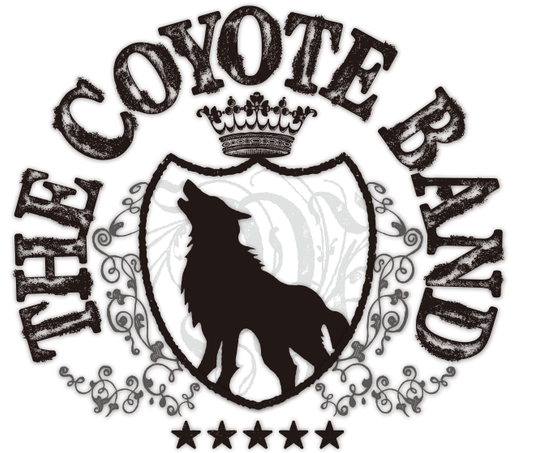
BSプレミアムの「ヴィジターズ」ドキュメント、興味深く観ました。ただただ「ヴィジターズ」の凄さにため息。デラックス・エディションが待ち遠しいです。この秋、週末には日本のどこかで佐野さんが唄ってると思うだけで何だか素敵な気分になりますね。ライブいっぱい楽しみましょう！（奥山千亜紀）

アルバム→ツアーからツアー→アルバムに変わりつつある佐野さんですが、今回のツアーで新作が出来上がる予定ということで「Ｚｏｏｅｙ」から約2年、やっと本来の佐野さんのインターバルに戻りそうです。何しろ「Ｃｏｙｏｔｅ」と「Ｚｏｏｅｙ」の間が6年ですから。「月と専制君主」がありましたけれど。次作でコヨーテバンド3部作が完成ですね。以前も編集後記で書きましたが、これから先、佐野さんの新譜をタイムリーに聴くことができるのはとても貴重なことだと思います。心して待ちたいものです。この秋のツアーでニューアルバムが生まれます。盛り上げて行きましょう。（小林史明）

いよいよコヨーテバンドとのツアーが始まりました。ちょっと前には佐橋さん30周年コンサートで久しぶりにフルメンバーとなった日ＫＢの演奏も堪能。こんな凄腕のバンドを2つも率いているシンガーソングライターは佐野さんを措いて他にはいないのではないでしょうか。新作も楽しみです。（矢島一朗）

今号は全国ツアー初日終了後にお時間をいただいて会報インタビューを行いました。今回のインタビューでは、事前にライブでのセットリストを知りたくない方がいらっしゃることを考慮して、具体的な演奏曲名については記載しておりません。ライブ会場で、みなさんの目と耳でお確かめの上、お楽しみください。（山田和弘）

写真／黒須一彦



Cappuccino Talk Meeting

ファンクラバーと編集部の交流の場である読者投稿コーナー

2014年秋ツアーへの期待

アルバム「ＺＯＯＥＹ」もだいぶ頭に身体になじみました。秋からのツアー、地元ライヴ楽しみにしています。「詩人の恋」を聴きたいです。行くぜ、新潟ＬＯＴＳ！（小林麻央）

「ＣＯＹＯＴＥ」と「ＺＯＯＥＹ」のアルバム両方好きですがなかでもボーラスタアが大好きです。ボーラスタアのアレンジバージョンカッコイイですがオリジナルバージョンも大好きでまた聴きたいので両バージョン唄って頂けたら嬉しいです。元春とＣＯＹＯＴＥバンドのステキな笑顔にも会いたいです。（Ｂｌｕｅｍｏｏｎ）

編…川崎にて素晴らしいスタートを切った秋ツアー。11月末のファイナル公演まで、各会場、皆さんで盛り上げていきましょう！


（小林麻央）